

「この世のはじまる日を待ちながら

首をしめてみたいな、と思った。

目の前にいる、可奈恵の首を。

すると可奈恵は片眉をぴくりと上げて、言う。

「あら、どうかした？」

可奈恵は異常なくらい鋭い。

「ん、なんでもない」

本当のことを言ってみたかったものの、やっぱり誤魔かしてお  
く。

首をしめるといっても、可奈恵が憎いわけじゃない。もし

かしたらそうなのかも知れないけれど、意識的にはちっとも思っ  
ていない。

なら、好きか　そう訊かれると絶句してしまう。あえて答え  
れば「好き」とはいつても、そんな二文字で切り捨ててしまうに  
はあまりに大きなものが、私の可奈恵への気持ちにはくっついて  
いる。

「それでね、それからがまた面白いの…」

可奈恵が話を再開する。自分の考えをとりあえずおいておくこ  
とにする。

## 海の底の廃墟

遠い目。

乃里子さんは、窓の外を見ている。

なにかを言いかけて、思いなおしたように口をつぐんだ。窓の外を見て、遠い目をした。

なにかがおかしい。

乃里子さんが、じゃなく。

きつと、この世界そのものが。八月三十一日からずっと。おかしいのだ。

## 希望入りパン菓子

夏が近い。

空はよく晴れていて、窓のカーテンがまぶしく光っている。いまは午後一時。一日のうちでもっとも暑い時間が、これからやってくる。

だから私は、学校の保健室にいた。

「琴子さんてさ、なんで保健の先生になったの？」

私はベッドの上でうつぶせになっている。ベッドのまわりのカーテンは開けたままなので、机に向かってなにか事務作業している琴子さんの、白衣の背中が見える。

『「琴子さん」って呼ぶのはやめなさい」

いつものとおり琴子さんは振り向きもせず、事務的な冷たい声で答えた。

「え、だめ？ だって、四十歳とかになったら絶対そんな風に呼ばれないよ？ 今のうちだけだよ、『琴子さん』だなんて。

それに、琴子さんって生徒にはフレンドリーな人じゃないからさ、なかなか『琴子さん』だなんて呼べないし。もしかして、『琴子さん』って呼んだのって私が最初じゃない？ もしかしたら最後になるかもね。

で、琴子さんが四十歳になって、もう絶対『琴子さん』だなんて呼ばれなくなったら、私のことを懐かしく思い出すわけよ。そういえば、自分のことを『琴子さん』って呼んだのは、あの子だけだったな、ってさ」

## 人生に必要な技術

校内放送に、いつものテープが流れる。

『ただいま四時三十分です。生徒の皆さんは五時までには下校してください。繰り返しです……』

この図書室にも、古いスピーカーから声が流れる。校庭のスピーカーからも聞こえてきて、二つの声が微妙にずれて重なっている。

私は、カウンターの上の小さなベルを取ろうとした。

ベルに手が触れる寸前、まるでさらっていかかのように彼女がベルを取ったので、私の手は空をつかんだ。

ちよつと驚いて横を見る。彼女が動いた気配はまるで感じなかった。

彼女はベルを振って、チリンチリンというさえない音をたてながら、

「閉館です。本の貸し出しを希望されるかたはすみやかにカウンターにきてください」

と、あまり大きくない声で言った。

図書室は、私と彼女のほかには、筆談で話をしている生徒が三人いるだけだった。この三人は、四時すぎに来てからずっと筆談を続けていた。私は、あんなに書きつづけてよく手が痛くならないものだと思って見ていた。

筆談の三人が帰ると、彼女はエアコンのスイッチを切り、図書室の鍵を持って、

「帰ろう」

と言い、出口のほうへ向かった。

私は、自分の手をぎゅっと握りしめた。

「待つて」

彼女は振り向いて、眼鏡の奥の目を、いぶかしそうに細めた。

エアコンの音がしなくなった図書室は、しんと静まりかえっていて、真夜中の学校に少し似ている。